

## 学事日程等の検討状況について

常任理事 長谷山 彰

秋入学の問題提起をきっかけに、高等教育における学事日程等のあり方が広く議論されることとなったのは周知のとおりです。このことについて慶應義塾は「学事日程見直しに関する懇談会」を発足させ、全学部長を中心に議論を続けてきました。その結果、2014年度学事日程について以下の共通認識を得て、昨年7月にこれを公表しました。

現状の2学期制の学事日程を土台にして、並行して4学期制の実現が可能となるような学事日程とする。これは、各学部の個性を尊重しつつ、慶應義塾大学の特色である、学部やキャンパスを超えた学生の科目履修が確保できるよう、自由度の高い共通のプラットフォームを整備したものである。今後は各学部がそれぞれの特色を生かす授業科目の設置について検討を進めていく。

4学期制のメリットとして、集中性、国際性、多様性が挙げられます。4学期制科目は通常1週間に授業が2回行われ、2カ月程度で1科目が終了することを想定しています。そのため具体的な学事日程の変更は、現在の春・秋それぞれの学期の中央に、2014年度の場合は2日程度の試験期間を設けるという程度で、決して大きな変更とはいえないでしょう。しかし、4学期制科目の議論が各学部で始まったという点に、将来のカリキュラム改正への大きな可能性が感じられます。今後解決しなければならない問題もありますが、各学部の検討状況に応じて、2014年度以降4学期制科目が増加していくことが期待されます。

1991年の大学設置基準の大綱化以降、日本の大学は大きく変化してきました。これは大学の社会的な位置付けが変化し、社会からの期待も大きくなっているということです。特に近年は変化が加速しており、今回の多くの大学が参加した学事日程の議論は、大学の国際化、グローバル人材の育成といったキーワードがきっかけの一つとなりました。

慶應義塾大学はいつの時代も、常にカリキュラムや教育制度について議論を行い着実に変化してきました。今回の学事日程見直しのきっかけとなったキーワードである国際性について、学士課程レベルで実施されている例を挙げるなら、伝統のある交換留学生制度の充実、長期休校中における海外の大学での短期国外研修やフィールドワーク、留学生などが英語だけで卒業が可能なコースの設置、海外の大学とのダブルディグリー制度、卒業に必要な単位の6分の1程度の専門科目を英語による少人数で行うプログラム、医療分野における海外フィールドワークなどがあります。その他にもさまざまな制度が用意されています。

この度の学事日程の検討も、新たな工夫の一つとして位置付けることができます。現在、さらに広く教育問題について検討すべく、全学に跨る会議体で次の議論を開始しています。慶應義塾大学はこれまでのように、また今後も、学生にとって何が良いのか、常に考えながら進化していきます。